演習クラスにおける着席行動の研究

——女子大学における3事例の分析——

麻布大学 鈴木百合子

A study of seat-taking in seminar classes: Data analysis
of three seminar classes in a women's university

Yuriko Suzuki (*Faculty of General Education, Azabu University,
Fuchinobe, Sagami-hara 226*)

The purpose of this study was to examine the conditions under which human territoriality (self / other boundary-regulation mechanism) appears in seat-taking behavior. Seat-taking in a social psychology seminar class of twelve students at a women's university was observed during the 1983, 1984 and 1985 academic years by female part-time lecturer (the author herself). At the beginning of each class, the lecturer drew the figure of the students' seating arrangement at a rectangular table, while calling each student's name. Questionnaires were also administered to the students at the end of the observation in the period 1983 and 1985 academic years. The results obtained were: 1) each student was more attached to one seating area and seating side than the others, 2) this fact reflected her seating preference to some extent, 3) no student monopolize the special seats to which she was most attached, 4) extra spaces were left between the lecturer's and the students' seat. The third finding was considered to be due to homogeneity of the student with respect to major, grade and sex and their temporal relationships within the seminar group. Also the fourth result was due to the status difference between the lecturer and the students, which led to the recognition that the seating places were mutually exclusive for both sides of them.

Key words: seat-taking, seminar class, participant observation, women's university, lecturer's territory, students' territory.

先に鈴木・本間(1984)の行った職場会議における着席行動の観察から、成員のなわばり性(territoriality)のあらわれとして、特定の場所への固執性(仮説1)、地位差を反映した集団成員の座席配置(仮説2)、時間の経過に伴う成員の特定席の集団内安定化(仮説3)、個人化された席(なわばり)に他成員が侵入するときの心理的抵抗感(仮説4)が検証された。本研究では、等質的学学生集団の観察事例を加えることによって、人間のなわばり性、即自己と他者との境界を調整するメカニズム(Altman, 1975, p. 107)が、着席行動に現れる条件を検討する。

筆者は、非常勤講師として、都内の某女子大学における通年の演習のクラスにおいて、学生の着席行動を3年度にわたり参加観察する機会を得た。そこで、この資料の分析を通して、学学生員間に地位差、専攻差をもたないゼミ集団においても、先の職場集団で検証されたようななわばり性が見られるかどうかを検討する。

特に上記の仮説1, 2および4について検討したい。仮説4に関しては、先の研究では、他者のなわばりに侵入する際の心理的抵抗感という意識的側面から検証したが、今回はそれを行動的側面から検証する。

始めに、先の鈴木・本間(1984)、鈴木(1986)の研究で扱った観察場面や観察集団と、本研究におけるそれとの異同を明らかにしながら、作業仮説を導いていこう。先の観察場面は、職場における月1回の定例会議であったが、本研究の観察場面は週1回の演習のクラスである。観察持続期間は、前者は2年、後者は1年(共に夏、冬、春の休暇を除く)である。期間の違いはあるが、両者共、大学という環境内で、観察対象者が着席行動を通し、或一定の空間と接触を続けている点では同じである。先の研究の仮説1で述べたように、人が或一定の空間と接触を重ねるにつれて、特定の場所に固執する傾向があるならば、本研究においてもまた、それが見られる筈である。では学生はどのような着席場所に固執するのだろうか。先の研究(鈴木・本間, 1984)の観察終了後に行った面接によれば、会議成員が座席決定にあたって考慮した要因としては、1. 空間的好み 2. 議長席との関係 3. 隣席との関係があげられている。議長席との関係は、主として地位差や古参度を反映し、また隣席との関係は、専攻の類似や研究室の近接、親和を反映していた。本研究の場合、学生間には地位差や専攻差がないので、

学生は社会的序列ではなく、教師や友人との個人的人間関係や、空間的好みを反映して座席を決定することが予想される。

次に観察集団について比較すれば、先の研究の観察集団は、大学教師によって構成された職場集団で、成員の殆どが男性であった。成員間には地位差があって、それが会議における座席配置に反映され、高位者(教授)集団のなわばりが上座に、低位者(助教授・講師)集団のなわばりが下座に形成された。また成員の専攻が自然系かそれ以外かによって、着席側が入口側か窓側かに分れる傾向があった(鈴木, 1986)。本研究における観察集団は、女性講師と女子大生から構成されるゼミ集団で、講師と学生の身分上の差がある以外は、学生間に公式的地位差はない。また、専攻も等しく心理学専攻で、専攻差、性差のない等質的集団である。集団成員は全て3年生で、選択必須のこの演習に4月から参加したのであるから、力量的に見た個人差は、観察開始時に、まだ集団内で露になっていない。以上のような観察集団の特徴からして、本研究の場合、学生の座席配置は、社会的秩序を反映した慣習に支えられるのではなく、むしろ、学生個人の着席場所の好みに基づいて決まるだろう。学生相互の場所の好み折合うところに、座席配置の決まることが予想される。学生の固執する領域が、個人や集団にとって“なわばり”と言えるかどうかの判断は、Altman & Haythorn (1967), Altman, Taylor, & Wheeler (1971) および Sundstrom & Altman (1974) が定義するように、その領域や物体が、個人や集団によって、相互排他的に用いられるか否かに関わり、Sommer (1969) も述べるように、人間のなわばり性の場合には、なわばり防衛のために、必ずしも身体的闘争や攻撃を伴わないものとする。しかし、講師と学生間には地位差があるという社会的認識から、着席場所にゆとりのあるとき生ずる空席は、講師と学生たちの席の間に残され、それぞれの地位上の同一性を保って、相互に相手の領域に侵入しないことが予想される。以上をふまえて、本研究で検証する作業仮説は次の通りである。

1. 各学生には、固執する着席域や着席側があるだろう。着席域とは、講師からみて近いか遠いかの区別をさし、また着席側とは、講師からみて右側か左側にあたる環境的区別をさす。
2. 各学生の固執する着席域や着席側は、学生個人の着席場所の好みを反映しているだろう。
3. 等質的学生集団の内部には、力関係の段差がないので、どの学生も各自が固執する特定席(最頻席およびその隣席をいう)を独占することはないだろう。
4. 着席場所にゆとりのあるとき生ずる空席は、地位差を反映して、講師と学生たちの席の間に残されるだろう。

方 法

観察対象 東京都内の某女子大学心理学科3年の、社会心理学演習受講生である。受講生の数は、各年度とも12名であった。

観察期間 '83年、'84年、'85年の3年度にわたり、4月に始まる通年(4, 5, 6, 7, 10, 11, 12, 1月の8か月)の演習のクラスの観察を行った。観察回数は'83年度および'84年度は23回、'85年度は18回であった。

観察場所 演習のクラスの教室は、年度によって異なり、'84年度は Fig. 2-a に示すように、矩形テーブルが室内に設置してあったが、'83年と'85年度は普通教室であった。普通教室の場合、講師は授業開始日にゼミの導入を与えてから“この教室は普通教室なので、次回から自分達で工夫してゼミを行い易いように机を並べておいて下さい”と指示を与えた。学生たちはその結果、始業前に 60 cm×40 cm の学生机を並べて、中ぬき矩形のゼミテーブルを作った。授業の行われた時間帯は、3年度とも月曜日の2限(10時50分から12時20分まで)であった。講師は観察開始日に始業の約7分過ぎに入室した。学生たちの約3分の2は着席していた。学生たちが講師のために残しておいた席は、3年度とも、矩形のゼ

.83	.70	.96
8	6	7
.96	7	9
.87	6	11
.91	8	10
.83	5	7
0	0	1
.00	.00	.04

Fig. 1-a. Table arrangement on classroom in '83 and symbols for seats and areas.

Size of room: 934 cm×555 cm. Space surrounding table: 46.0770 m². Lecturer's seat: 0.

Fig. 1-b. Seating occupancy rate (exterior area) and number of different occupants (interior area) for each seat in 23 meetings with students of '83.

ミテールプの短辺であった。'83年度と'85年度は、それは黒板を背にした教卓の前であったが、'84年度は入口側であった。

手続き 観察者は非常勤講師の筆者で、“皆さんの顔と名前がなかなか一致しないので”と言って、学生のひとりびとりに名乗らせ、出席をとり乍ら毎回学生の座席配置図を作った。また、'83年度と'85年度の観察終了後、学生にゼミテーブルの図を与え、各成員が期間中最も多く座ったと思われる席に、氏名リストの中から選んで姓を当てはめさせ、またその確信度を記入させた。そしてこの座席配置の認知図上に、自分の好きな席と嫌いな席を記入させ、それらの席が、好きおよび嫌いな理由を記述させた。

着席場所の表示 矩形のテーブルの、講師から見て右側と左側で着席場所を区別した。それぞれの着席側にあたる環境条件は、年度によって異なる。他方、ゼミテーブルを6領域に分け、講師のいる短辺をA領域とし、その対岸にあたる辺をD領域とした。講師から見て右

側の長辺の、講師に近い方の半分をB、遠い方の半分をC領域とし、左側の長辺も同様、B'、C'領域として区別した。各領域中、椅子がおかれて着席可能な場所(席)を、講師を0とし、講師からみて右手を正、左手を負の符号を付し、講師からの距離の近さの順に番号で表示した。'83年度は14席、'84年度は18席、'85年度は13席で、それぞれ定員(講師+学生)の13名に、+1名、+5名、±0名分の席があったことになる(Fig. 1-a, 2-a, 3-a参照)。'84年度はテーブルが長く、余分の席があるので、講師もA領域の2席を交代に使った。

結果と考察

特定の着席域と着席側への固執性 着席域が講師の近くか遠くか、着席側が講師の右か左か、各学生がそのどちらに多く座ったかの着席頻度を、各人の総出席回数に対する%で示し、その差を χ^2 検定して、有意差の信頼水準を示したのが、Table 1-a, 1-b, 1-cである。各年度とも12人の中、'83年度は11人、'84年度は9人、また'85年度は7人が一方の着席域や着席側に他方よりも多く座り、その差は5%以下の危険率で有意である。また、'83年度と'84年度は着席域に関して、学生は教師の近くよりも遠くに多く座り、その平均着席率には各5%

Fig. 2-a. Table arrangement on classroom in '84 and symbols for seats and areas.

Size of room: 721 cm × 410 cm. Space surrounding table: 22.9472 m². Lecturer's seat: 0.

Fig. 2-b. Seating occupancy rate (exterior area) and number of different occupants (interior area) for each seat in 23 meetings with students of '84.

Fig. 3-a. Table arrangement in classroom in '85 and symbols for seats and areas.

Size of room: 720 cm × 365 cm. Space surrounding table: 21.5800 m². Lecturer's seat: 0.

Fig. 3-b. Seating occupancy rate (exterior area) and number of different occupants (interior area) for each seat in 18 meetings with students of '85.

Table 1-a
Percentage of seating preference, results of χ^2 test and index of monopolization per person in '83

Member	Attendance frequency	Seating area (%)			Seating side (%)			I. M.
		C.	F.	p.	L.	R.	p.	
K. A.	23	13	87	***	24	76	***	0.65
R. O.	18	33	67	***	22	78	***	0.44
M. G.	22	9	91	***	14	86	***	0.81
H. S.	20	45	55		85	15	***	0.45
T. N.	19	26	74	***	84	16	***	0.63
Y. F.	17	18	82	***	18	82	***	0.53
I. H.	19	32	68	***	55	45		0.63
E. M.	23	30	70	***	74	26	***	0.70
R. S.	18	39	61	*	83	17	***	0.56
Y. A. (T)	12	92	8	***	92	8	***	0.83
R. T. (T)	18	72	28	***	17	83	***	0.61
K. M.	20	60	40	*	25	75	***	0.65
Mean	19	39	61	*	49	51		0.63

Table 1-b
Percentage of seating preference, results of χ^2 test and index of monopolization per person in '84

Member	Attendance frequency	Seating area (%)			Seating side (%)			I. M.
		C.	F.	p.	L.	R.	p.	
H. A.	18	50	50		44	56		0.33
M. E.	21	7	93	***	90	10	***	0.71
N. K.	19	13	87	***	100	0	***	0.63
A. K.	21	69	31	***	52	48		0.57
Y. S.	17	50	50		12	88	***	0.35
J. S.	22	70	30	***	68	32	***	0.32
Y. T.	22	9	91	***	95	5	***	0.68
M. N.	17	41	59		24	76	***	0.71
A. F.	21	17	83	***	19	81	***	0.43
R. B.	17	68	32	***	53	47		0.35
K. M.	18	25	75	***	11	89	***	0.61
M. Y.	23	9	91	***	22	78	***	0.78
Mean	20	36	64	***	49	51		0.53

と1%の信頼水準で有意差が認められる。年度により学生の着席偏好の様相が異なるのは、テーブル内の座席数や、教室内の空間事情に関係すると思われる (Fig. 1-a, 2-a, 3-a 参照)。'85年度は教室内のテーブル周囲の空間の広さ(3年度中最も狭い)や、構造(普通教室で教卓や学生机がある)からして、他年度よりも学生の自由な座席選択の機会が、妨げられていたと考えられる。

着席場所の好みと現実の着席場所 各学生が現実に関

執した着席場所は、果してその学生個人の着席場所の好みを反映しているのだろうか。'83年度と'85年度には、各10名(2名は欠席)の学生から、計20枚の座席配置の認知図を得ているので、その図の上での学生の好きな席と自分の席との一致率(前者)および、認知図上の好きな席と、現実に座った最頻席との一致率(後者)を調べた。全員が一致した場合を100%、全員が不一致の場合を0%として一致率を示すと、両年度を併せて前者の一致率は

Table 1-c
Percentage of seating preference, results of χ^2 test and index of monopolization per person in '85

Member	Attendance frequency	Seating area (%)			Seating side (%)			I. M.
		C	F	p	L	R.	p	
N. I.	12	50	50		42	58		0.25
A. I.	16	43	57		88	12	***	0.38
Y. O.	15	27	73	***	47	53		0.40
A. O.	16	38	62	*	31	69	***	0.38
J. T.	16	75	25	***	56	44		0.44
H. N.	16	31	69	***	6	94	***	0.67
Y. N.	12	75	25	***	42	58		0.33
M. N.	16	44	56		75	25	***	0.63
K. O.	18	39	61	*	67	33	***	0.50
S. M.	17	47	53		53	47		0.35
H. Y.	15	27	73	***	80	20	***	0.67
Y. M.	12	50	50		8	92	***	0.50
Mean	15	45	55		50	50		0.46

***: $p < .001$, **: $p < .01$, *: $p < .05$ (significant levels).

C: Close to the lecturer's seat.

F: Far from the lecturer's seat.

L: Left side of the lecturer's seat.

R: Right side of the lecturer's seat.

I. M.: Index of monopolization per person.

(T): Transferred student.

80%, 後者の一致率は 40% である。後者の一致率が前者より低いのは、学生の入室時刻により、現実には好きな席がふさがって着席できないという、時間的制約が考えられる。次に着席場所を席ではなく、着席域や着席側に範囲を拡げて、仮説 2 を仮説 1 との関係で考えてみる。認知図上の好みの席と、現実に座った最頻席の着席域における一致率は、'83 年度は 100%, '85 年度は 80% であった。またその着席側の一致率は、'83 年度は 90%, '85 年度は 70% であった。以上から学生が固執する着席域や着席側は、学生個人の場所の好みを反映しており、現実には学生の入室時刻や部屋の構造という、時間、空間的制約を受けていたと言えよう。質問紙に答えた 20 人の学生が、その席を好きとしてあげた 29 の理由の内訳は、先生からの距離が適当 9, 入口側だから 9, 窓側だから 7, 奥・隅だから 2, 何となく落着く 2 であった。

独占されない各学生の特定席 仮説 3 検証のため、個人についてと、席についてと、2つの独占度の指標を算出した。個人については、各学生の特定席への着席率 (I. M.) を求めた。着席率は特定席にその学生が座った回数を、その学生の出席回数で割って算出し、毎回その席に着席すれば 1, 1 度も着席しなければ 0 になる。特定席として、その学生の最頻席およびその両隣りに限定し、各個人の着席率を算出して Table 1-a, 1-b および

1-c の右端に示した。0.5 以上の I. M. 値をもつ学生の人数は、12 人中年度順に 10 人, 7 人および 5 人いるが、1 のものはどの年度にもいない。学生は特定席に固執する傾向があっても、これを独占する者はいないと言えよう。また、席についての独占度の指標として、各席が観察期間中に何人の違った学生によって占められたかを調べ、Fig. 1-b, 2-b および 3-b の内側に示した。例外 ('83 年度の +1 席および '85 年度の 0 席)を除き、各席は 2 人以上の違った学生によって占められている。以上のように二つの指標から見て、各席が特定の学生によって独占されていないことは明らかである。仮説 3 は検証されたといえよう。独占されない理由としては、学生たちが等質的でその座席配置が職場集団の場合のように、集団内序列や社会的慣習に支えられておらず、入室時刻が遅れても個人の特定席が残っている程、集団内で安定化していないことが考えられる。もう一つの理由は、選択必須の授業で集った学生ゼミ集団の人間関係は、一時的なものであり、職場集団の場合のように、会合時間を越えて永続するものでないことが考えられる。人間関係が永続的な場合は、そうでない場合に較べて、家庭内の場所の利用の仕方がなわばり的なことを Roseblatt & Budd (1975) は、結婚しているカップルとそうでないカップルの調査において実証している。

空席の残される場所 設置されたゼミテーブルにおけ

る座席数が、ゼミの定員を上まわったり、欠席者のあった場合に空席はどこに残されるのであろうか、仮説4検証のため'83年、'84年および'85年度の観察期間中に、学生が各席を占めた頻度を観察回数で割って占有率を求め、その数値を Fig. 1-b, 2-b および 3-b の外側に記した。占有率の最高は1, 最低は0である。A領域における平均占有率は、年度の順に、.13, .00, .32で、A領域以外のそれは、同様、.90, .67, .92であって、A領域は明らかに他領域よりも占有率が低い。講師の座るA領域は、たとえ空間的ゆとりがあっても、学生には着席しにくいことが窺われる。着席場所にゆとりのある'84年度は、A領域に次ぎD領域の占有率も低く、また、B・B'領域中のA領域の隣席も占有率は0である。これらの席は、'83年度と'85年度に学生が質問紙に答えた24の嫌いな席(A領域11, D領域6, B領域の+2席2, B'領域の-2席5)と対応する。その席が嫌われる主な理由は、A領域の講師の隣席は講師の顔が見えず、友人の視線を受け、緊張しすぎることにあり、D領域の講師の真向いは、講師と視線の合うことにあるが、同じ理由がB'領域の-2席にもある。他は入口とか窓とかの室内環境要因に帰せられている。これらの席は学生が着席するのに抵抗感があり、空間事情が許す限り、行動的に着席を差控えるため空席が残されと考えられる。A領域は“講師の個人なわばり”として学生たちから認知されていたと言えよう。講師もまた特に意識したわけではないが、観察期間中に一度もA領域以外に着席したことはなかった。講師のこの行動は、A領域以外を“学生たちの集団なわばり”として認知していた証拠であ

り、講師と学生たちの間に残された空席は、両者の間にある公認された地位差を、双方が着席行動を通して無言の中に表明しているものと思われる。

引用文献

- Altman, I., & Haythorn, W. W. 1967 The ecology of isolated group. *Behavioral Science*, 12, 169-182.
- Altman, I., Taylor, A. A., & Wheeler, L. 1971 Ecological aspects of group behavior in isolation. *Journal of Applied Social Psychology*, 1, 76-100.
- Altman, I. 1975 *Environment and social behavior: Privacy, crowding, personal space and territoriality*. Monterey, California: Brooks/Cole.
- Rosenblatt, P. C., & Budd, L. G. 1975 Territoriality and privacy in married and unmarried cohabiting couples. *Journal of Social Psychology*, 97, 67-76.
- Sommer, R. 1969 *Personal space: The behavioral basis of design*. Englewood Cliffs, N.J.: Prentice-Hall.
- Sundstrom, E., & Altman, I. 1974 Field study of territorial behavior and dominance. *Journal of Personality and Social Psychology*, 30, 115-124.
- 鈴木百合子・本間道子 1984 着席行動におけるなわばり性の研究 心理学研究, 55, 109-112.
- 鈴木百合子 1986 会議場面における着席行動の研究——なわばり維持における集団内地位の効果—— 心理学研究, 57, 83-86.

——1989.1.11. 受稿, 1989.9.9. 受理——